

日本山岳会の壮挙 ヒマラヤ踏査に 携行した ポータブル受信機



マナスル登山隊用
NRC-HM-1型ポータブル

1952年8月、日本山岳会によりヒマラヤ山脈マナスルの踏査が行われたが、これに NRC-HM-1 型ポータブル受信機（中島無線製）が携行され、登山にかなり重要な役割を果たしたことは、すでにお知らせしたが、この使用記を日本山岳会の中尾氏にお願いした。

ポータブル受信機とモンスーン

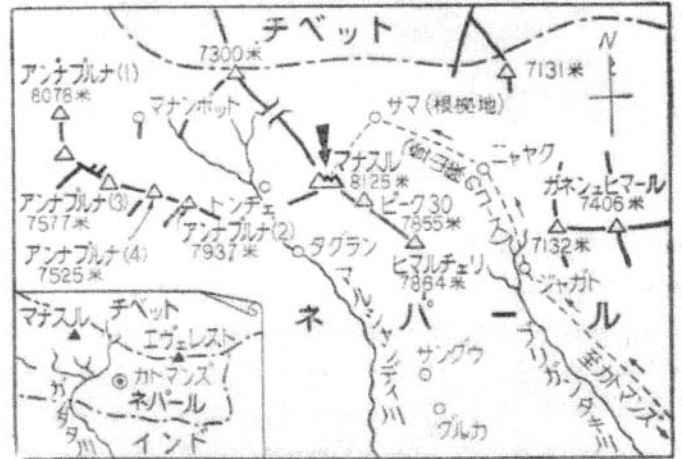
マナスル登山隊がカルカッタから、空路、ネパール国の首都カトマンズに到着したのは9月6日であった。いよいよここからマナスルの踏査に向うわけである。

カトマンズを出発してから、アルガットバザール、タルカットバザールを経て、海拔 3,500 m の高所にある マナンダポット、それから 5,000 m のラルキヤ線を越えて、サマのベース・キャンプに到着するまでの長い行程を、ポータブル受信機で各国の放送をよく聞きながら登ったのだが、沢山の印度の放送が実ははつきりと聞えた。

印度の放送局は短波が非常に多く、この点携行した受信機がオール・ウェーブであったことは、非常に有利だった。ポータブル受信機は主に天気予報を聞く目的で用意されたのである。というのは、この登山がモンスーン（雨季）のやつてくるギリギリの直前に行うのが、最も好果的であったからで、いつおそいかかるかわからない大雨や大雪に対して、万全のそなえをしなければならぬからである。だから、この登山にはモンスーンのおし寄せの時期をカルカッタやチリ局の放送に頼ることが絶対に必要である。

登山中のポータブル

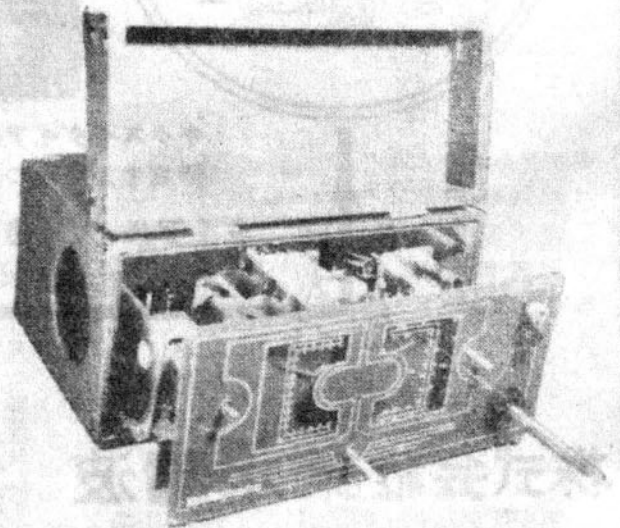
登山中はポータブルを聴くことが隊員に取って唯一の楽しみであった。左右に切りたつた 1,000 m 以上もある深い峡谷を進んで行くとき、1.5 m のアンテナに 0.5 m の補助アンテナを付けて、ポータブルを聴いてみると、なつかしい日本の放送（NHK 海外放送）がバリバリと入ってきたときはうれしかった。また、カトマンズやカルカッタ、デリー、ボンベイ、セーロン、遠くはシドニーやモスクワ、それに VOA などの極東向放送がかなりの強度で明瞭に受信できた。いずれにしても、今度携行したポータブルが十



分実用になつたことはたしかである。登山隊の一行は、祖国を遠く数千 km もはなれた、しかも世界の屋根ともいわれるヒマラヤ山中で、手にとるように祖国の放送に耳をかたむけることができたのは、ポータブルによるほかはない。

これからの登山用ポータブル

今度のような多人数の遠征隊では、携行したポータブル受信機の高さ、(270 mm × 150 mm × 350 mm) 重量（約 2 kg）とも決して苦にならなかつたばかりか、この次の登山にはぜひ 2 台はほしいと思う。一台は本誌のよりにしつ



NRC-HM-2型ポータブル

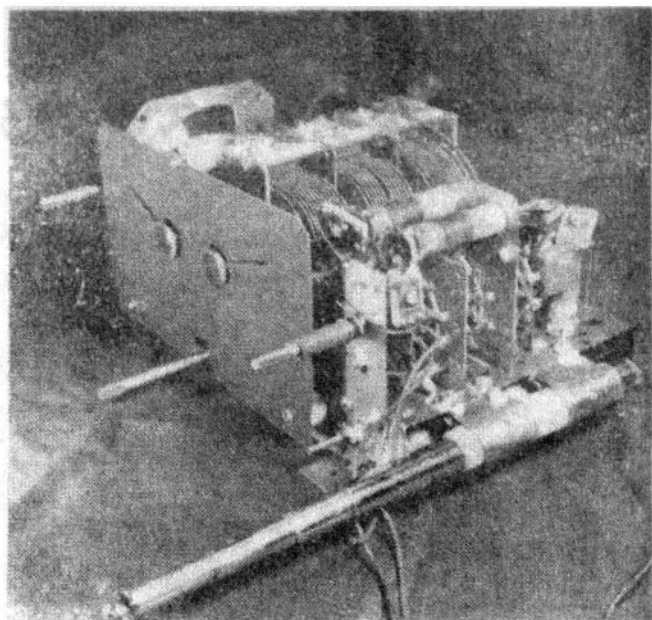
かりしたものを、もう一台はポケットにしまえる位の小型で、しかも軽量のものがほしい。ベース・キャリブ用の受信機としては多少大きく重くとも、もつと長時間使える電池がほしいと痛感した。でき得れば次回には予備電池もゆるすかぎり深山持つて行きたい。いずれにしても、感度がよく、長時間使用でき、しかも強固にできているということが、登山用ポータブルとしては不可欠の問題である。

(日本山岳会 中尾佐助)

新登山用ポータブル

このマナスル登山隊の貴重な体験にもとずいて、NRC-HM-1型に種々改良を重ねて、NRC-HM-2型がこれほど完成した。これは、今回マナスルのとなりにあるヒマラヤの処女峰アンナプルナ第二峰に決死的なアタックを試みる、京大学山岳会(AACK)が携行したものである。高山におけるポータブルの研究にかなりの成果をあげることをラジオ界から期待されていることはいままでもない。なお、本登山隊の一行は今西寿雄隊長以下6名で、現地地約120人のポーターを雇用する予定である。一行は8月30日羽田発BOAC機でインドのカルカッタに向けて出発した。

登山用受信機として、設計上一番問題になるのは、高山における温度の問題である。山上において、太陽が出ている間は相当な高い温度となり、夜間は零下40度という風に温度の変化が極端になるが、それに耐えなくてはならない。また、温度変化のために感度低下するのが一番問題である。HM-2型は調整した後でコイル、中間周波等はポリエチレンにて加工をして、温度並に湿度等による性能の低下を防いでいる。積層乾電池等も-40度になると液が凍り起電しなくなるので、特別に作られた耐寒電池を用いなければならない。重量も相当な距離を持つてあるくた

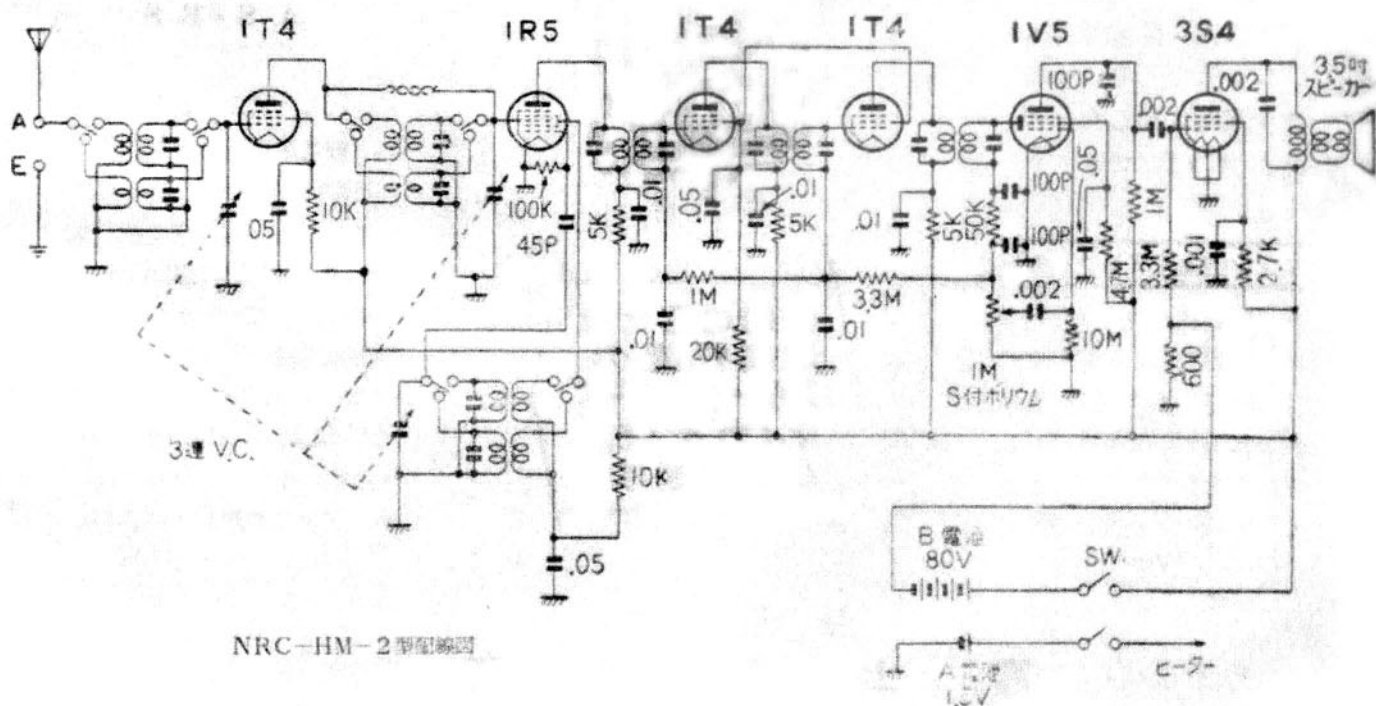


NRC-HM-2型シャーシー前面

めに軽量にし、大体2kgにした。本機の受信バンドは3.5 Mc~9 Mcと6 Mc~18 Mcの2バンドである。使用真空管は1T4(高周波増幅)1R5(周波数変換発振)1T4(中間周波増幅2段)1V5(第2検波、AVC、低周波増幅)3S4(電力増幅)の6球でバンド・スプレッド付3連バリコンを使用している。

電源は、電池専用でB電池にBV-130(45V)2個を直列にして90Vとし、A電池は共通性のある単1電池を使用している。容量を持たせるために、重量は犠牲になるが、単一(1.5V)を5個並列にして使用する。ダイアル用の糸なども普通の三味線糸などでは温度変化のためにのびたり、ちんだりしてプーリーがスリップしたり、切れたりするもので、これをさけるために、ナイロン製の糸を用いた。

(中島無線 K.K. 技術部)



NRC-HM-2型配線図